

第 54 回北海道音楽教育研究大会釧路大会に参加して

七飯町立七飯中学校
音楽科 教諭 佐藤 圭佑

前任校、岩見沢市立中央小学校で期限付き教諭として勤務していた際に、地域連携研修として北海道音楽研究大会（全道音研）に視察派遣して頂きました。研修完了後、参加レポートの作成と研究授業の公開が課せられており、このレポートはその際に作成、提出したものです。平成 24 年度のものですが、北海道における音楽科教育の実際と課題が見えてくる内容となっています。

平成 24 年 11 月 2 日
岩見沢市立中央小学校
教諭 佐藤 圭佑

全道共通主題 音楽のよさを生かし、豊かな心と確かな力をはぐくむ
音楽教育
釧路大会主題 伝えあい ひびき合う よろこび

去る 11 月 2 日、釧路に於いて第 54 回北海道音楽教育研究大会釧路大会が行われた。

大会は釧路市立青陵中学校の音楽集会で幕を開け、公開授業と研究討議、津田正之氏の公演、歌声とともにと題して大会を振り返るアトラクションの 4 つの催しを柱として、盛大に行われた。

以下それぞれの項目について、私見を交えながらレポートを行っていきたい。

1. 音楽集會 — 釧路市立青陵中学校 の取り組み

大会は、釧路市立青陵中学校の音楽集会で幕を開けた。同中学校は、校下の小学校 3 校と連携した「地域連携交流合唱祭」を生徒指導部が主体となり、この活動を展開している。各小学校の 6 年生と、学年縦割りで分けたグループ（ブロック）で練習した合唱を地域に披露するもので、単なる合唱交流、披露というレベルに留まらず、社会性の基礎であるコミュニケーション能力の育成、中 1 ギャップへの対応など、多くのねらいと願いを含んだ活動であると紹介があった。

今年度は、研究大会の 3 日前に合唱祭を終え、大会では中学生のブロック合唱のみの披露であったが、少しずつ大人の声に近付いている中学生特有の混声合唱の響きが体育館全体に響きわたり、生徒 1 人 1 人がひたむきに声を出す姿、人の声と歌の持つ力にただ感動するのみであった。学校教育において音楽科の果たすべき役割の一端を、改めて提示していただいたように思う。

2. 公開授業 研究討議 — 中学校第3分科会(3年) 釧路市立阿寒湖中学校

小・中義務教育9年間の連携した教育活動の展開が求められている近年、私もまた「義務教育9年間の音楽科教育の展開」を意識して、日々の授業作りを心がけている。今回は義務教育9年で辿り着くべき姿を参観したいと考え、中学校3年生の授業を参観した。

本授業は6時間構成で、公開授業では第5時を取り扱った。内容は、三部形式の楽曲の第三部「旅立ち」のイメージに合う表現方法を、個人、パートごとに考え、全体で考えを交流し、**思いや意図を持って表現を工夫し曲を作り上げる**という内容であった。授業の展開は、生徒に思考・判断・表現させる過程を大事にした、素晴らしい授業展開で、生徒と教師の日頃からの信頼関係の構築が感じられる授業であった。

また授業の様々な場面で、生徒たちがこれまで受けてきた音楽教育の積み重ねを感じさせられた。箏を弾く技術もさることながら、音楽(音)を知覚・感受し、思考・判断・表現し、自らの言葉で他者に発信する、ということが授業の中で頻繁に行われていた。これはこの題材のみで習得した力ではなく、小学校から中学校、中学1年から2年、中学2年から3年へと、学びが積み重なって形成されてきた結果だろう。義務教育9年の音楽教育で目指す一つの姿を、この授業は示してくれたように思う。

最後に教材について触れておきたい。本授業で取り扱った教材は、アイヌ古式舞踊《鶴の舞》のテーマを元に、教育大学岩見沢校の尾藤教授が書き下ろした作品である。《鶴の舞》は、阿寒湖のアイヌコタンで踊られる古式舞踊で、生徒には馴染みのある音楽であるようだ。そのような地域素材を用いて、専門教育を受けた作曲家に作品委嘱をし、教材として扱ったという事前準備も、この授業では特筆すべき点であった。

中学校第三部会 3年 釧路市立阿寒湖中学校

表現・器楽

曲想を味わって表現しよう

教材：丹頂鶴そして旅立ち～サロルンリムセのテーマによる（箏二重奏）
丹頂鶴の旅立ち～サロルンリムセのテーマによる（箏三重奏）

※教材は、北海道教育大学岩見沢校 尾藤 弥生 教授 作曲の委嘱新作

3. 講演 — 津田 正之 氏(文部科学省初等中等教育局 教育課程課 教科調査官)

午後からは会場を移動し、講演が行われた。津田氏は釧路出身で、北海道公立小学校教諭から東京学芸大学博士課程を単位取得満期退学した後、琉球大学准教授を経て、現職。

「これからの音楽教育に期待するもの」と題して講演された。主に、音楽教育が学校において果たしている役割、これからの音楽教育に求められていることという流れで講演された。

音楽教育の本質である「共同体験」、「感動の共有」が、学校教育に大きな影響を与えていることに触れられ、「生きる力」を構成する要素の1つである「豊かな心（人間性）」は音楽によって育まれると強調されていた。そのためにも、音楽科の授業において、音楽を知覚・感受する過程を大切にし、〈音楽的な感受〉を高め、「感性」、「情操」、「想像力」、「創造力」といった美的情操の育成の重要性を、資料や全国の実践例の映像などを交えて解説された。

加えて、21世紀という多様な価値観とグローバル社会で生きていく子どもたちが、日本の伝統音楽を学ぶ意義についても触れられていた。自国の伝統と文化を大切にする態度の育成は、自己及び日本人のアイデンティティの理解と、文化の多様性を理解する力によって形成されていく。

地球規模で考え、行動していくことが求められている現代人にとって、必要な力の育成—グローバルな視点での思考、文化の多様性の理解—の一端を音楽教育は担っていると、講演を通じて感じさせられた。

4. 歌声とともに — 合唱とともに大会を振り返る

講演終了後、釧路市立景雲中学校合唱部、北海道釧路湖陵高等学校合唱部による演奏とともに、大会を振り返るスライドショーが上演された。歌声に始まった大会が、歌声によって締めくくられるという演出であった。

ここでもやはり、子どもたちの歌声の持つ素晴らしさに聴き入りながら、学校教育において音楽教育の果たすべき役割の大きさと、音楽そのものの持つ力の偉大さを実感させられた。

20世紀アメリカを代表する指揮者であり、作曲家で教育者でもあったレナード・バーンスタインは「音楽は言葉で表現できない深い感情をも、表現することができる」と述べていた。また、シラーの詩と一部自らの言葉も盛り込んだ、ベートーヴェンの交響曲第9番の歌詞には「すべての人は兄弟となる」という部分がある。

音楽に目に見えない力があるとするならば、音楽教育の第一義的目的は「見えないうものへの感性を養うこと」なのではないかと思う。それは、人類の宝である偉大な芸術作品に触れ、美しいものを美しいと感じる心を育みながら、ひいては人の痛みや思いを想像する力、他者と関わっていくコミュニケーション能力の育成へとつながっていくのではないだろうか。

そのようなことを考えながら会場を後にし、幣舞橋から見える釧路の夕闇に、ふと中央小の子どもたちが歌う合唱が頭をよぎった。